

雑感・・・新米調査員として、今思うこと

竹下 士郎

毎年実に多くの出来事が私たちの身の回りで起こり、そのたびに私たちは泣いたり、笑ったり、怒ったり、びっくりさせられたりするるのであるが、その多くはいつのまにか私たちの記憶から消え去っていく。しかし、阪神大震災をはじめ、地下鉄サリン事件や拉致事件など一連のオウム真理教のニュースに多くの人々が恐れおののいた1995年。人間の弱さやはかなさ、傲慢さを思い知らされたと同時に、逆に暖かさや力強さを感じることできたこの年のことは、長く人々の記憶から消えることはないだろう。

これらの大きな出来事や事件に加えて、これまで十数年間、中学校の社会科の教師としてやってきた私にとっての1995年は、まさに人生の大転換点としても忘れられない年になりそうである。というのは、特に希望をしたわけでもなかったのだが春の人事異動で、京都府埋蔵文化財調査研究センターへの出向を命じられたのである。学校を変わるだけの異動であれば単純に気持ちを切り替えて、また新たな生徒たちとの生活を考えていけばいいのであるが(そう簡単にはいかないから、それはそれで難しいのであるが)、今回はそういうわけにはいかない。まさに一から出直し、再出発という感覚である。埋文センターがなにか発掘をやっているらしいということぐらいは知っているが、考古学の知識などほとんど持ち合わせておらず、ましてや発掘調査の経験も全くない。たまたま勤務していた学校は長岡京右京域に所在していたので、以前、学校の体育館の改築に先だって敷地内で発掘調査が行われた。その調査の成果がどのようなものだったかは知らないが、その様子を校舎の上から見ながら歴史の授業をしたことがある。考古学的教材を実際に利用して授業をしたのは後にも先にもこれが一回だけであったし、発掘調査なるものを直接自分自身の目で見たのもこれが本当に初めてのことであった。これまでに先輩の教師に、「教師はとにかくいろんなことに興味を持ち、いろんなことを見聞し、経験すべきだ。」と言われたことがある。自分でもそれはその通りだと思っていたし、進んで様々なことを経験しておくべきだと思っていたのだが、いざ自分がこのようなことになってみるとうろたえてしまう。離任式の日、見上げる生徒たちを前に、「これまでは生きた人間相手でしたが、これからは物言わぬ土器や土くれを相手にしてきます。それらはなにも言わないけれども大事

な歴史の証人達です。その証人達をさがしだす仕事です。がんばってきます。」と自分では格好よく言ったつもりだが、内心は大きな不安でいっぱいだった。しかし実際に仕事を始めてみると、当然のことながらわからないことばかりでうろろうろするだけであったが、そんな中で、学校について、教育について、実に多くのことを考えさせられた。うろろうしながらもこれまでの自分の実践について振り返ってみることも多かった。

たとえば、現場に行くとすぐに、地面の下から掘り出される多くの土器片や住居跡などを見ることになるのだが、これらが予想以上に多くのことを語ってくれるのである。わからないことも多いが、とてもいろいろなことを想像させてくれる。考古学素人の私にも昔の人々の生活のにおいがぷんぷんするのである。できることなら、この昔の人々の生活のにおいを生徒にも是非かがせてやりたいと思った。中学校の社会科の中で歴史の授業は、週4時間で約1年間(140時間前後)おこなう。「約1年間」というのは、いわゆる指導要領などにあるきまりごとでは、1年間なのである。しかし実際は、積み残してしまい次の年の最初までかかってしまうことが多いから「約」なのである。この約1年間で人類の起源から近代までを教えることになる。しかも日本史だけではない、日本を中心とした人間の歴史の授業である。ダーウィンの「進化論」から始まり、クロマニヨン人、ネアンデルタール人、そしてエジプト文明、メソポタミア文明などを経て、いよいよ日本の縄文時代の話へとすすんでいくのである。後のことを考えると、はじめから約10時間ぐらいで卑弥呼、邪馬台国の話に入らなくてはならないから本当に大変である。140時間で約400万年の人類の歴史を振り返るわけであるから、平均1時間あたり約3万年の歴史を教えることになる。3万年はちょっと極端かもしれないが、1時間の授業の中で数百年単位で話がすすんでいくことはよくある。超高速タイムマシンに乗っているようなもので、気がつくとも歴史的事実の羅列だけに終わってしまっていることも多い。そんな授業では、昔の人々の生活のにおいなんてとんでもない。そんなことより生徒たちは、机の中の弁当のにおいの方が気になってしまう。そのような中で、生徒たちはこの時間の幅、数百年の中に数え切れないほど営まれている人間の生活を、いったいどのような感覚でとらえているのであろうか。はたして私はこの時間の重さ、生活のにおいをきちんと伝えてきたのであろうか。生徒に教える前に、自分自身が、これまで累々と積み重ねられてきた、日常の人間の営みにどれだけ目を向けていたのだろうか。言葉だけを並べ立て、暗記を押しつける、無味乾燥な授業だけはしたくないと思ってきたつもりではあるのだが、これまでやってきたことを振り返ると、何となく恥ずかしいことも多い。歴史とは何か、いったい誰が歴史を作ってきたのか、歴史の授業でいったい何を教えていくのか、なにを考えさせていくのか、もう一度自分の中で整理していく必要があるそうである。先日、藤ノ木古墳が中学生によって荒らさ

れるという事件があった。今私は、土器のかけら一片から、それを作った人々や、それを使った人々の生活、願い、夢といったことにまで思いがはせられる、そんな授業をもっと作っていきべきだったと思う。そしてその土器一片を守ることが、自分たちの未来を保障することにもなる、と考えられるような生徒を育てていきたいと思う。そんな中から正しい文化財保護の視点も育てていくこともできるのではないかと思う。

また、仕事を進めていく上でいちばん最初に困ったのが測量である。いわゆる測量用具の操作法や、ましてや測量の方法などまったく知らなかったのだから。そのうえ、まさかこの歳になってややこしい三角関数などを使った計算をしなくてはならないなどとは思ってもみなかった。しかしこのことは、新たな感動の始まりでもあった。これまで授業のなかではあたりまえのように等高線のことなどにもふれてきたが、実際に自分の目で大地の上の等高線を見つけだし、図面の上に記していくのである。なにげなく見ていた、そして教科書としてしか見ていなかった地図帳が、急に身近に感じられるようになる。こんな感動を自分の授業のなかで生徒達に与えることができたのだろうか。言い古されたことではあるが、もっと実生活、実体験と学習した知識とを結び付けることができれば、生徒の学ぶ喜び、知る喜びを引き出すことができたのにと、改めて思う。

調査地の横を学生服の生徒が通る。今は教師ではないのだが、どうしてもその格好や様子が気になる。聞こえる声につい耳をそばだててしまう。そこで、これまで学校の中で見てきた生徒たちの表情とは何となく違うものを感じて悩んでしまう。どこがといわれると困ってしまうのだが、これまでの自分と立場が違うせいもあるのだろうが、何か違うような気がする。また、一緒に調査に参加していただく作業員さんや整理員さんたちといろいろな話をしていると(その人たちは学校に行けば当然保護者ということになるのだが)、学校で保護者と話している時とはずいぶんと表情や様子が違う。それは当たり前といえば当たり前のことだが、ここでもいったい教師とは何なのか考えさせられてしまう。今学校は、そして教育は、いじめ、自殺、非行といった問題を始め、多くの課題を抱えている。なかなかその解決の糸口さえつかめない現状だが、もっと学校の内と外との間にあるギャップに目を向けていく必要があるようである。そんなことができる教師が必要だと思うのだが、そして、そんなことができる余裕がもっと教師には必要だと思うのだがどうだろう。無責任な言い方にもなりそうだが、今考えると、あまりにも教師は忙しすぎる、そしてあまりにも学校の中に閉じこもりすぎているようにも思えるのである。

調査員としての仕事はまだこれからである。様々な土器や、遺構のこと、そして図面の書き方や整理の仕方など、勉強すべきことが山ほどある。こんな人間に大事な遺跡の調査が任されていると思うと、何となくおそろしくなってしまうこともあるが、自分にとって

はとてもすばらしい経験をしていると思う。実際の調査活動は天候に悩まされたりして大変なこともよくあるが、様々な人との新たな出会いもあり、今のところ結構楽しくやっている。教師としての自分を改めて見つめ直すことにもなっている。1995年を単なる人生の転換点としてだけでなく、大いなる飛躍の年だったと思えるようにしていきたい。2年目は、生徒たちに言ったように「歴史の証人たちを探す仕事」にさらに没頭してみたいと思う。

(たけした・しろう＝当センター調査第2課調査第2係調査員)